



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東大第2大卒業後、大阪大第2内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。著「菜のやめどき」「痛くない死に方」は、いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

換えれば、忍耐の人生。勇気の人生。そして創造の人生である

日本を代表する知の巨人がまた一人逝ってしまいました。哲学者の梅原猛さんが1月12日に京都市内の自宅で亡くなりました。享年93、死因は肺炎ですが、限りなく老衰に近いものとお見受けします。梅原さんは60歳のときに大腸がんになりましたが、それから30年以上も偉大な仕事をし続けられたことに、60歳の私は、ただただ頭が下がります。

「人生は、ただ向こうから与えられるものではない。自ら創ってゆくものである。自ら創ってゆくにはやはり三つの段階が必要なのだ。ラクダの人生とライオンの人生と小児の人生。言い

91 哲学者 梅原猛さん

若いころに読んだ梅原さんの著書に書かれていた、この言葉を今もときおり思い出します。人生の3段階が忍耐、勇気、そして創造だとはなんともユニークな提言です。創造の時代が、最後にやってくるというのが、



またいいではないですか。私も還暦なので、創造の時代に突入したいのですが、現実はいかなうまくはいかないものです。もう一つ、梅原さんの著書から教えられたのが、「草木国土悉皆成仏」という涅槃(ねはん)経にある言葉です。日本で最初に言い始めたのは空海さんらしいですが、元はお釈迦様の言葉だとか。草や木のように心を持たないものでも仏性を有しているからすべて成仏できる、という意味です。このような仏教思想を研究し続け梅原さんは、脳死の人からの臓器提供を可能とした「臓器移植法」(1997年施行)に反対をいたしました。

脳にのみ魂が宿り、身体は機械に過ぎないという西洋哲学的な二元論は日本人には合わないとの主張です。施行当時、提供者の意思確認がないまま移植手

術が行われた事例が立て続けにあり、ことさら梅原さんは危惧を抱いていたようです。しかし臓器移植法で救われた命もあります。肉体とは一時の借り物で、死んだ後に臓器を他人様に使ってもらおうという考えもまた、仏教的かもしれませぬ。しかし、あくまでも本人の意思ありきです。私が啓発し続けている「リビングウイル」と一緒に臓器提供の意思も書いておきたいもの。それがない人の臓器提供には反対です。一度、この件について梅原さんとお話があったのですが叶わず残念でした。

最期は自宅で子どもや孫たちに見守られ、「おじいちゃん、ありがと」という言葉を聞きながら満足げな表情で旅立たれたそうです。「すばらしい大往生だった」と息子の賢一郎さん。なんという言葉でしょう。己の最期を子や孫に見せること。それもまた、創造の人生ではないでしょうか。

忍耐、勇気、創造の人生をまっとう